

nsylvania College of Dental Surgery の上級に在学していた頃、一年級の若い学生が口頭試問の教室に坐っていた。慎み深く、気取った所の無い学生で、クラスの誰ともあまりなじみがなかった。試問をする解剖学の教授が、第5脳神経の分布について訊ね始め、誰もが答えられなかった。最後にこの学生に当てると、てきぱきと次から次へと答えて行くので、先生はどこまで知っているかをためそうとするように、次々と質問した。それはクラス中を大変興奮させるような雰囲気であったが、結局の所この学生は知らない事がないので、彼には何も教えるべきことがないということ被我々は発見した。』

Miller は1904年10月11日細菌学の講義をした時に、自慢そうに我々の大学についてこう言った。『この大学が世界中で最も設備が良い学校の一つだということや、最も勝れた教授陣を持った大学の一つだということだけでなく、貴方の教授たちが学生の個性の発達に興味を持ち、学生の誰でもが友達で、教授の誰でも学生の友達であるということなのだ。』

以上を資料を提示して詳細に報告する予定である。

37) スピロヘータ分類学上の

野口英世の業績の医史学的分析

Studies on the Medico-historical Analysis
on the Work of Hideyo Noguchi as to the
Classification of Spirochetes

東京歯科大学微生物学教室 ○福本 裕

森山 徳長

太田 功正

奥田 克爾

高添 一郎

Yutaka Fukumoto, Norinaga Moriyama,
Koosai Ohta, Katsuji Okuda and Ichiro
Takazoe, Dept. of Microbiology, Tokyo
Dental College

われわれは第16回本学術大会で野口の業績の発表論文資料により分析し、経年的に分類した。野口が最初に取り組んだ研究は蛇毒に関してであったが、その後黴毒スピロヘータの純培養に成功し、診断用のブチール酸試験法を開発し注目を浴びた。その後黄熱の原因として黄疸出血性レプトスピラ（ワイル病病原体）を検出し、ワクチンも開発した。ウイルス研究法手技が確立できていなかった時代のことであり、南米で成功したかに見えた野口の黄熱ワクチンもアフリカでは無効で、結局野口はアフリカで殉職する結果となった。

黴毒研究に関連して野口はトレポネーマ属、ボレリヤ属の口腔スピロヘータについても研究を発表しており、トレポネーマ、ボレリヤ、レプトスピラなどの形態学的スピロヘータ分類学の確立に果たした役割は大きい。

1900年代初頭に次第に輪廓を明らかにして来た古典的細菌学におけるスピロヘータの分類・命名の上に残した野口の足跡を、原著・綜説論文、教科書、Bergey's Manual 等をたどって明らかにしたい。

1928年には野口は在来の研究の成果をまとめて、スピロヘータ類の分類・図示を試み、体系化した。すなわち Family Spirochaetaceae のもとに Spirochaeta, Saprospira, Cristspira (大型自

然界分布)と Treponema (狭義の Treponema および Borrelia を含む), Leptospira の 5 属に分類し, それらの形態, 性状の比較一覧表を作製した。

この主として形態学を基礎とした分類法は, その後長い期間一般に広く用いられ, 多くの教科書, なかんずく細菌分類学の基本となる Bergey's Manual (5 版) におけるスピロヘータ属 (科) の分類に引用されており, 当時としては非常に優れたものであった。

以上の内容について, 史料を示して詳細に報告したいと思う。

38) 東京歯科医学専門学校歯科学叢書の書誌学 (その 6)

—第六編矢崎正方著「最近継続架工術」および第十三編矢崎著「歯冠継続架工学」について—

Studies on the Dental Textbook Series of the Tokyo Dental College (Part 6)
—The Bibliography of the Vol. 6 “Modern Crown and Bridge Work” and Vol. 13 “Textbook of Crown & Bridge Prosthesis” by Masakata Yazaki.—

東京歯科大学 ○小幡 哲夫
杉山 邦夫
白川 尚
熱田俊之助
森山 徳長

Tetsuo Obata, Kunio Sugiyama, Hisashi Shirakawa, Shyunnosuke Atsuta and Norinaga Moriyama, Tokyo Dental College

本叢書第 6 番目には, 当時洋行帰りで新進気鋭の助手でドクトル矢崎正方の書下した「最近継続及架工術」が出版された。当時該当課目教授の宇垣錦三は米国留学中, 助教授松井礼七, 実習担当教授ドクトル尾崎稀三をとび越えての起用であり, 矢崎が囑目されていたことが理解される。

初版自序で『歯冠継続及架工術』ハ近來急速ノ進歩ヲ遂ゲ殆ンド旧觀ヲ一変スルニ至レリ可撤架工義齒ニ於テ然リトス余ハ本邦ニ於テ此方面ニ関スル著書少キヲ最モ遺憾ノ事ナリト信ジ浅学ヲモ顧ミズ本書ヲ編述シ書中可成的挿図ヲ多クシ讀者ノ諒解ヲ便ナラシメル事ニ勉メタリ然レドモ全卷ヲ通ジテ増訂ヲ要スルモノ極メテ多カルベシ切ニ江湖ノ叱正ヲ俟ツ。水野寛爾先生ノ講義ハ本書ノ基礎ヲ為シ宇垣, 松井兩教授ノ指導ハ余ヲシテ此ノ業ニ当ルベキ勇氣ヲ生ジセシメタルモノナリ茲ニ記シテ深甚ナル謝意ヲ表ス(新漢字体)矢崎正方』と述べていることでその間の事情がわかる。

叢書の前駆的役割を果たした「歯科学講義」では, 「歯科技工学」が早川可美良・宇垣錦三, 「継続及架工術」が水野寛爾の担当であった。それを引続いだ本叢書では, 第 5 編「最近歯科技工学」が奥村鶴吉と技工学教授遠藤至六郎の共著で大正 8 年 11 月上梓され, 9 年 8 月本書がそれに続いたものである。

本書の書誌的構成は, 扉—1, 序—2, 文献—2, 目次—7, 本文—390, 付録自習問題—6, 索引—6, 奥付—1, 広告—1 の計 416 頁 (16 版による), 菊版縦書旧字体片仮名交り文で, 暗緑色洋布装裱の上製本である。叢書各編と同様に表紙と背に金文字で Modern Crown and Bridge Work と刻印がある。

半年後に出版の二版の序で字句訂正, 図版の改善の他に和英文索引を加えた事, 大正 12 年 12 月の六版では, 大震災後急遽訂正の暇なく第六版を出した事, 昭和 3 年 12 月には可成りの訂正を行った事を序に述べている。本書は長命で, 昭和 5 年 5 月発行の 16 版を本学で所蔵している。(なお 20 版まで出たことが 13 編序に記されている。)

その後の学問の進歩に合わせて, 叢書第 13 編として新しく「歯冠継続架工学」(昭 13. 8. 26, 再版同 15. 1. 26) が上梓された。

序で矢崎は, 『大正 9 年 (1920) の前著の頃の斯学の状況は, 1917 年を峠としてその前後数年間に著しく進歩の跡を示し, 大正 9 年頃はその過渡期にあったといえる。当時は「継続及架工術」と称し, 内容も進歩した諸外国に比較すると全く隔世